

白藍塾オリジナル

2016入試小論文分析&解答のヒント

2016年4月発行

白藍塾の入試小論文分析は、他の予備校と違って、その問題に対して受験生がどのようにアプローチすればよいのかを具体的に説明している。そのため、この分析を参考にすれば、誰でも合格レベルの答案を書けるはずだ。該当の大学・学部の志望者は、ぜひ、これを読んで、自分で実際に答案を書いてみてほしい。

執筆・大原理志

●慶応・文学部

課題文は、動物の名付け方についてのレヴィ＝ストロースの分析を紹介した文章だが、話題があちこちに飛んでいるので、要約するのはかなり難しい。しかも、最後につけ義春の漫画を紹介して、それまでの議論をひっくり返しているのだから、何が言いたいのかがわかりにくいかもしれない。だが、結局は、動物の名付けを通して、「人間の思考と行動は社会の構造によって規定されている」という構造主義の考え方を説明するのが、筆者のねらいだろう。その意味では、文学部らしい問題と言える。

具体例などを除いて課題文を簡単にまとめると、次のようになる。「動物の名付けには一定の規則があるが、それは犬、鳥、牛などの動物の種類によって異なる。つまり、動物の名付けは、その動物と人間社会との関係に応じて異なる厳密な規則に従って行なわれ、決して飼い主の自由になるわけではない。このように、人間の思考と行動は帰属する社会の構造によって規定されるとするのが、構造主義の考え方だ。だが、動物の側にとっては、人間のつける名前などどうでもよく、人間の命名行為も単なる虚構にすぎないのかもしれない」。

設問Ⅰは、以上の内容を字数に合わせてふくらませるとよい。

設問Ⅱでは、「人間にとって『名付ける』とはどのようなことか」が問われている。課題文は動物の名付けについて論じているが、「名付けるという行為が社会的に規定されている」という点では、動物以外の場合も同じことだ。したがって、そうした考え方が正しいかどうかを問題提起するのが正攻法だ。

とはいっても、これに反論するのは難しい。素直にイエスの立場に立って、命名が社会的な行為であることを具体例を使って説明するのが書きやすいだろう。たとえば、子どもの名前も一見親が自由に選んでいるようだが、「ポチ」や「シロ」といった名前を付ける親がいないように、やはり社会的な通念に縛られている。キラキラネームが批判されるのもそのためだが、キラキラネームは、逆に名付けが流行に左右されることの証明とも言え、この視点から名付けの社会性を論じることもできるだろう。

もちろん、子どもの名付けに限定する必要はない。そもそも、モノに名前がついているのは、それらを区別して認識しやすくするためだが、たとえば日本語の「水」や「湯」が英語だと一括して **water** になるように、モノの命名の仕方は言語や文化によって異なる。つまり、モノの名付けも、社会的に規定されていると言える。そのように、言語のあり方にまで論を深

めることができれば、さらに文学部らしい、説得力のある内容になるはずだ。

©執筆者の許可なく本紙の全部もしくは一部を無断転載、無断複写することを固く禁じます。

発行・白藍塾総合情報室 (03-3369-1179) <http://www.hakuranjuku.co.jp>